

戦後のびんがたの歩み

渡名喜 明

はじめに

今でこそびんがたは沖縄の代表的な染めものとして県の内外に知れわたり、需要も増えてはいるものの、今大戦前には那覇、首里でわずか数軒の店が注文の風呂敷や着尺、小物類を細々と染めていたにすぎない。その那覇・首里が焦土と化したのであるから、終戦の時点でびんがたは絶滅したかに見えたが、先祖代々びんがたを家業としてきた城間家の栄喜氏、知念家の績弘氏は運よく戦争を生きのび、びんがたの仕事を再開した。本稿では両氏を中心として発展してきた戦後のびんがたの足どりを、具体的な資料を45ページ以下の写真で紹介しながら追ってみたい。

1. 廃墟の中で—びんがた再興の動き

1945年6月23日、日本軍の組織的抵抗が終了し、投降した兵士や民間人は米軍の指定した金網張りの一帯（収容所）にテント小屋や堀立小屋を造って生活を再開した。同年10月頃から収容された人びとは元の居住地への移動を始め、1946年8月には本土疎開者の引き揚げが始まった。

城間栄喜氏は昭和17年に大阪に染料を仕入れに行ったまま、現地で召集を受け佐世保に配属されたが、終戦後の1947年10月、熊本に疎開していた2人の子どもをつれて引き揚げてきた。氏は、首里山川のテント小屋で生活を始めると同時にびんがたの仕事を再開するための準備を始めた。とはいっても戦前から持っていた若干の型紙と染料以外に材料は何もない。道具つくりからまず始めねばならなかった。

型彫り用の小刀（シーグ）の刃は米軍使用の金切鋸の破片でつくり、柄は竹や竹箸でつくりた。砂糖きびのきびがらを束ねて染め刷毛とした。米国製レコードのかけらで湖引用ヘラをつくった。筒描き用の筒は米軍使用の厚手の布地で、筒先は銃丸でつくりた。型紙は、日本軍使用の軍用地図や米軍使用の厚手のハトロン紙で代用した。布は米軍配給のメリケン袋をほどいて使ったり、サラシ木綿を使った。

染料や顔料も少ない。赤瓦片をすりつぶし、水に溶かして橙色をつくり、米国婦人の口紅で赤、口紅と夜光貝の薄片をつぶした粉をまぜてピンクの色をつくった。

もちろん、びんがたで生活することはとてもできないから、戦前おぼえた魚釣りで生活費をかせいた。知念績弘氏は1946年に、疎開先の国頭村から那覇の山下町に引き揚げ、翌1947年に現在の樋川の地に移った。テント小屋での生活がしばらく続いた。知念氏もまたびんがたの製品や材料を10・10空襲ですっかり失っていた。氏も道具つくりから始めねばならなかった。時計のぜんまいの破片でシーグの刃をつくり、米軍使用の厚手の木綿で筒描き用の筒をつくった。ハトロン紙にニスを塗って型紙をつくり、杉板に釘を打ちつけて張り木とした。型彫り用の下敷は豆腐を固めたルクジュウを使うところだが、食料の乏しい時代のことであり、厚手のゴムで代用した。

戦前、父祖から受けついだり、自分で考案したびんがたデザインを忘れないようにとのことで、米兵（となきあきら・沖縄県立博物館学芸員）

使用のノートに描き写したり、紙製の屏風や木製膳に描いたりもした。米軍払い下げの厚手の木綿布に筒描きで松竹梅に鶴亀模様を染めてふとんカバーにしたのは、本部産の藍がふたたび手に入るようになつた1949年頃のことである。知念氏もまたびんがたでは生活を支えきれないことから、昼は軍作業に通い、晩にびんがたの仕事をするという生活を1968年まで続けた。

城間、知念両氏が生存していなければ、びんがたがここまで復興できたかどうか疑わしい。しかも城間家・知念家の後継者として両氏は正統なびんがたを継承しているのであり、その意味で両氏の存在はきわどっているといわねばならない。血筋だけでなく、戦後におけるびんがたの製作・指導の面でも両氏の果たした役割が抜きん出ていることはいうまでもない。

2. さまざま な 試み

1952年1月、画家の大城貞成・屋宜元六の両氏が城間栄喜氏のところでびんがたを学び始めた。しばらくして名渡山千鶴子氏、渡嘉敷貞子氏、仲本義子氏、末吉安久氏、森田永吉氏、藤村玲子氏らも城間氏のところに通い始めた。城間氏の長女道子氏も幼い時から栄喜氏の仕事の手助けをしていましたし、1952年10月に城間氏と結婚した鶴子氏もまたこの仕事に携わるようになった。

城間栄喜氏は1948年頃には石川の洋裁学院で、また1951年からは首里文化服装学院や首里高校でびんがたの指導をしたりしてはいたが、一時的なものであった。その意味で、びんがたの家系とは無縁な画家や女性が本格的にびんがたを学び始めたこの1952年という年は、戦後のびんがたの歩みを見るとききわめて意義深い年であったといわねばならない。翌1953年の2月には城間栄喜氏を中心に末吉安久氏、森田永吉氏、屋宜元六氏、大城貞成氏、名渡山千鶴子氏、渡嘉敷貞子氏等によって「紅型技術保存会」がつくられ、同年「紅型振興会」と名称を変更し、琉球政府から数回にわたって補助を受けた。この補助金は材料の購入や型紙復写のための旅費、工房の建築費用等に使われている。

城間栄喜氏は以前から着尺や幕、風呂敷、額絵などを染めていたが、後から始めた人びとにそのような仕事がすぐにできるわけはない。それに材料は少ないし、需要も少ない。また戦前の生活にくらべて戦後のそれは大きく変化している。米軍人や軍属にも販路を求めるべくならない。そのような事情が重なって、この時期からびんがたを日常生活の中に生かす方向で販路を開拓する試みが始まった。

型染めによるネクタイ、スカーフ、手さげ袋、ハンドバッグ、パラソルなどの服飾品類、鏡台掛、壁かけ、屏風、筒描きによるのれん、ピアノ掛などのインテリア・家具類等つくられた種類は少なくない。



城間栄喜氏（左）と工房の人たち（城間鶴子、屋宜元六、名渡山千鶴子、渡嘉敷貞子の各氏）。1953年頃。

和紙に染めたクリスマスカード、テーブルマット、テーブルクロスなどはもっぱら米軍人向けにつくられ、将校クラブの売店や米軍内のPXで販売された。

作品の発表も積極的に行っている。1952年頃発足した「1955年協会」の第1回、第2回の作品展（いずれも1953年）に多くの作品を出品したほか、1954年に沖展に工芸部が設置されると同時にびんがたの出品も開始されている。

今まで継続して製作・販売されているのは、壁かけ、屏風、テーブルセンター、のれんぐらいのものであり、種類からするとかなり減っている。それは、びんがたに対する評価が高まり、また生活が安定してきたことによって着尺や帯等の注文が増えたことによるものであろうが、びんがたの今後の発展を考えるとき、この時期の試みには無視できないものがあるようと思われる。

3. 画家の参加

1952年に城間栄喜氏のもとでびんがたを学び始めた大城貞成、屋宜元六、末吉安久、森田永吉の各氏はすでにその時には沖縄美術家連盟の会員として、また末吉、大城、屋宜の3氏は1949年に始まった沖展の当初からの主要メンバーとして、沖縄画壇の指導的立場にあった人びとである。

大城、屋宜の両氏は城間工房が手ぜまのため1955年頃、その隣に琉球紅型研究所をつくってそこに移った。両氏ともに当初は絵を描きながらびんがたも染める、そうした生活であった。大城貞成氏は沖展絵画部の運営委員として第8回沖展（1956年）まで絵画を出品、また本土の創元会にも作品を出品して1957年には会友になっている。びんがたの沖展出品は工芸部設置の1954年からで、1958年に運営委員となった。びんがたに専念するようになった1961年頃からは国画会にも出品し入選している。

屋宜元六氏も第13回沖展（1961年）まで絵画部運営委員として作品を出品、1954年には本土の東光会にも絵画を出品して入選し、1959年会友に推挙されている。びんがたの沖展出品は1954年からで、1958年には運営委員となっている。1964年頃から国画会、1972年からは日本工芸会に出品し、1972年には日本工芸会長賞を受賞して正会員となった。

末吉安久氏は沖展の創設に力を尽くした画家のひとりであり、沖展運営の中心メンバーとして第1回から第21回（1969年）まで絵画を出品し、ほかに陶芸やガラス工芸の審査にもあたった。1968年からはびんがたの会員としても活躍しているが、氏の大きな功績として無視できないのは1958年に設置された



1955年協会第2回作品展（城間栄喜、末吉安久、森田永吉、仲里勇、屋宜元六、名渡山千鶴子、渡嘉敷貞子、仲本義子、城間道子、藤村玲子の各氏）。
1953年11月。

首里高校工芸課程の指導教諭としてびんがたの後継者養成に力を尽くしてきたことである。

森田永吉氏は第6回沖展から絵画を出品し、第9回展で運営委員となつた。1960年には創元会に入選して準会員となっている。森田氏は1958年に首里高校に工芸課程ができると同時にその専任教諭となり、美術兼任の末吉氏とともに工芸課程の運営、生徒指導にあたっている。1964年にはびんがたで日本工芸館伝統技術賞を受賞し、翌年には金賞を受賞している。同氏は1966年に逝去している。



作業中の森田永吉氏(故人)
1953年頃。



作品製作中の名渡山愛順氏(故人)。
1965年頃。

に誘われてびんがたを学び始めた。1954年以降毎回沖展に出品、1956年に沖縄タイムス賞を受賞し、1958年運営委員となつた。1960年に紅型研究所を設立、1962年には沖展に25点のびんがたを特別出品している。1966年にはびんがたでは初めての試みとして個展を開催、1968年に日本民芸館展奨励賞を受賞した。1969年に逝去した。

名渡山愛順氏はすでに戦前から押しも押されもせぬ沖縄画壇の第1人者であり、また文化財の保護にも功績のあった人である。名渡山氏は、とくに沖縄女性をモデルとする人物画を得意としたことから、モデルの着用する絆やびんがたに強い関心を示し、城間栄喜氏ら「紅型振興会」のメンバーには側面的な援助をしている。大城貞成氏がびんがたを始めたのも同氏の勧めによるところが大きい。氏は絵を描くかたわら1955・6年頃から自身でもびんがたの製作を始め、1960年には光風会（絵画の部では1945年に会員）に出品し入選している。1970年8月逝去した。

4. 女性の参加

名渡山千鶴子氏は、城間氏のところで3年間ほどびんがたを学んだ後独立している。沖展出品は1954年の工芸部設置当初からで、1958年には運営委員となつた。1960年には夫君の愛順氏とともに光風会に出品し入選している。この年あたりから仕事は愛順氏に譲り、びんがた店の経営にあたった。

渡嘉敷貞子氏は、名渡山千鶴子氏

城間鶴子氏は栄喜氏の夫人として、また道子氏は娘として栄喜氏の仕事を手伝いながら独自の作品も手がけてきた。鶴子氏は1960年の第12回沖展から作品を出品し、1966年に準会員に推挙され、道子氏もまだ中学生でしかなかった1954年から出品を続け、1974年に会員に推挙されている。藤村玲子氏はまだ中学生でしかなかった1952年頃から城間工房でびんがたを学び始め、1954年から沖展に出品を始めている。以後西部工芸展に出品するほか日本工芸館の第8回民芸展にも出品し、銅賞を受賞している。1975年沖展会員に推挙された。

名渡山千鶴子、渡嘉敷貞子、藤村玲子の各氏はびんがたの家系とは無縁な女性である。首里高校に工芸課程が設置されてからは一般的な女性がびんがたの製作に携わることは珍しくなくなったが、この傾向は戦後のびんがたに見られる特徴のひとつであり、その意味でも3氏の果たした役割は大きいといえるだろう。



作業中の渡嘉敷貞子氏(故人)。
1953年頃。

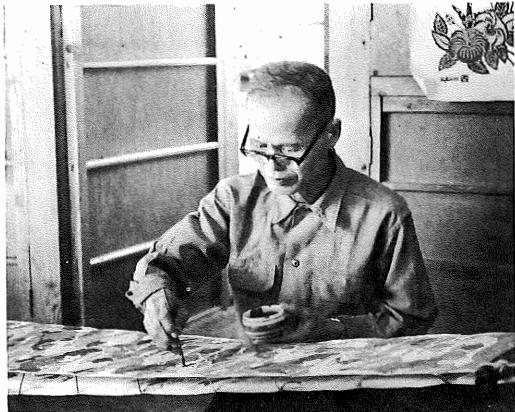
5. 首里高校工芸課程の創設

すでに述べたように1958年4月、首里高校に工芸課程が設置されたが、それは突然決まったものではなかった。1951年には時の校長阿波根朝松氏の発案でびんがたクラブができ、女性徒ばかり20名ほどが集まつた。担任は家政科の野里秀教諭で城間栄喜氏を講師に招いて、2・3年続いたようである。1957年頃米国民政府より普通高校にも職業課程を設置するようにとの指示があり、阿波根直成校長は工芸課程を置くことを提起し、翌1958年に家庭課程、食物課程と同時に工芸課程が設置されたのである。1958年度はびんがたのみ、翌1959年から織物実習が加わった。創設時の生徒は40名で専任が森田永吉、兼任が末吉安久(美術)、野里秀(家庭)の両教諭で、講師に漢那貞子氏、助手に藤村玲子氏が迎えられた。1960年、第1期生による第1回染めもの展、1961年には第2回染めもの・織物展が開かれ、以後毎年作品展を開催すると同時に卒業生を送り出している。1963年には織染科に科名が変わり、さらに1973年には染織デザイン科に変わっている。カリキュラムの変更によって現在ではびんがたに限らず染織一般の指導にあたっているが、それはともかくとして、若い層にびんがたへの関心をもたせると同時にその技術指導にもあたり、びんがたの仕事に従事する者の層を厚くしているという点だけを見ても、首里高校の果たしている役割はきわめて大きいといえるだろう。

む　　す　　び

1960年以降、びんがたは比較的順調に発展してきたといってよい。城間工房でびんがたを学んで独立

する人はさらに増え、また、城間氏の孫弟子にあたる人も増えてきた。知念績弘氏の指導を受けてびんがたに専念する人も出てきた。首里高校出身のびんがた作家も誕生している。そして、1973年（昭和48年）には、びんがたが県の無形文化財の指定を受けた。保持者は城間栄喜氏を代表とし、知念績弘、屋宜元六、大城貞成の各氏を会員とする「沖縄伝統びんがた保存会」である。「工芸史上重要な地位を占め」かつ「地方的特



作業中の知念績弘氏。

1976年。

色が顕著」であるという指定理由がついている。

1973年の無形文化財指定は戦後のびんがたの歩みにひとつの区切りをつけたとみてよい。いわば戦後のびんがたは新しい出発点に立ったということができる。びんがたに対する評価は一段と高まっているものの、原料確保や販路の開拓、手法の改良、後継者養成、あるいは伝統の継承と新しいびんがたの試みとの関連等々、現在のびんがたがかかる問題も少なくない。それだけに、今後のびんがたの躍進を考えるとき、戦後30年のびんがたの歩みを追ってみることは決して無駄ではないだろう。筆者の調査不足、力量不足でどれだけ的確にその歩みをつかむことができたか疑問ではあるが、今後のびんがたの発展とびんがた研究のために、本稿が少しでも役に立てば幸甚である。

本稿は、びんがたに携わる人びとに力点を置いたため、戦後のびんがたに大きく寄与した沖展や、資料提供等の役を勤めた当博物館の役割等についてはふれなかったことをことわっておきたい。最後に本稿をまとめるにあたり、多大の御協力をいただいた下記の方々に心から感謝の意を表したい。

城間栄喜氏、同鶴子氏、知念績弘氏、同績元氏、末吉安久氏、名渡山千鶴子氏、名渡山愛拡氏、大城貞成氏、屋宜元六氏、田名克子氏、徳村光子氏、大宜味ツル氏、森田文氏、玉那覇道子氏、田代孝子氏、藤村玲子氏、稲嶺一郎氏、大城清正氏、楚南光子氏、首里高校染織デザイン科、外間正幸氏

— 資 料 —

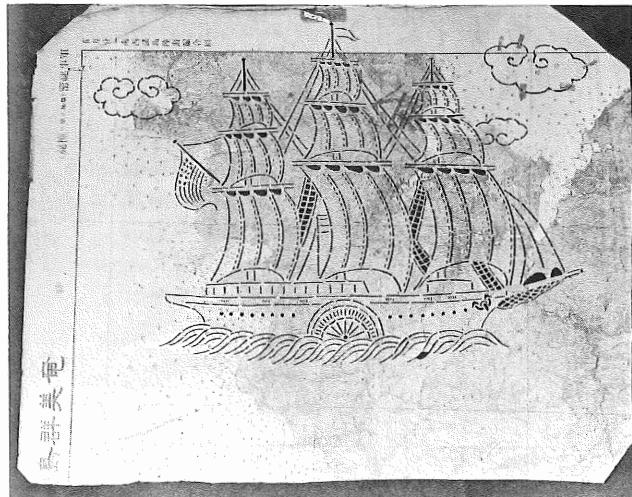
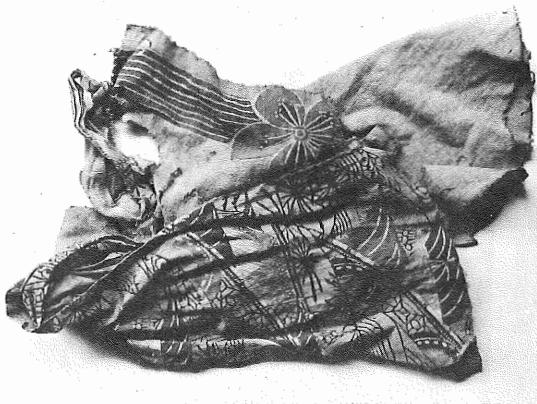
I. 廃墟の中から

— びんがた再興の動き

城間栄喜氏

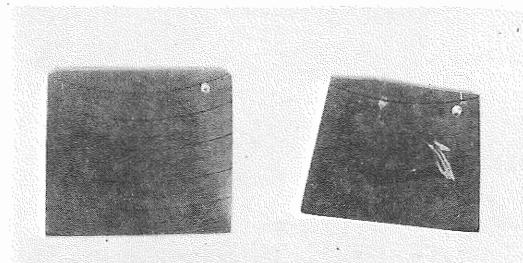
① びんがた裂

びんがたのつぎはぎのスカートを着て歩く女性と道で出会い、後を追いかけてその裂地を分けてもらい、染めの見本としたという。1947年。



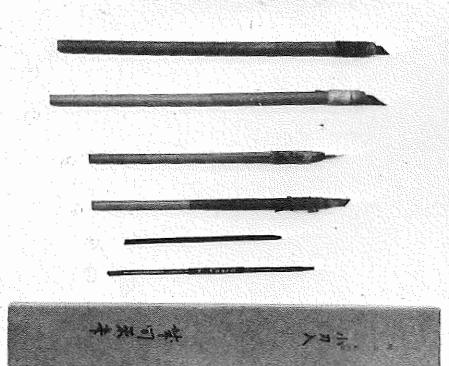
◀ ② びんがた型紙

守礼門下の日本軍壕からひろった軍用地図に彫った型紙。1947年。



③ 糊引用ヘラ ↑

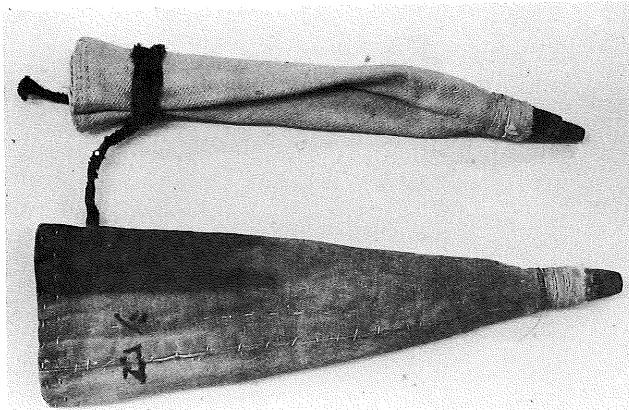
米国製レコードの破片で製作。1948年頃。



④ 型彫り用の小刀(シーグ)↑

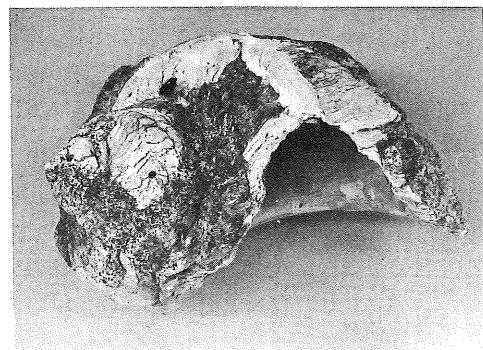
とアラレグワー

小刀は鋸の破片、柄は竹や竹箸でつくってある。アラレグワーは傘の骨で作製。1948年頃。



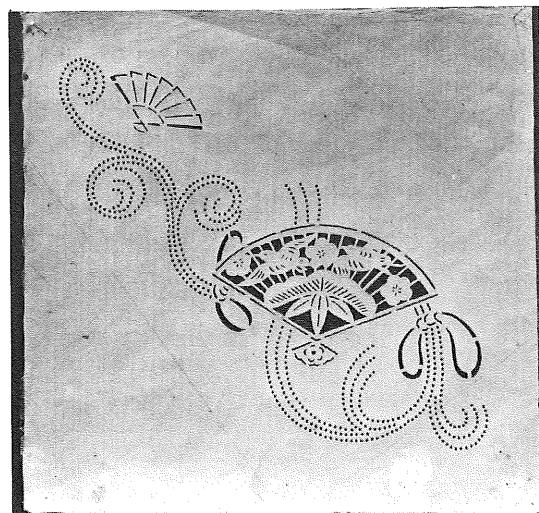
⑤筒描き用筒 ↑

布地は米軍払下げ。筒先(カニ口)
は銃弾でつくってある。 1948年頃。



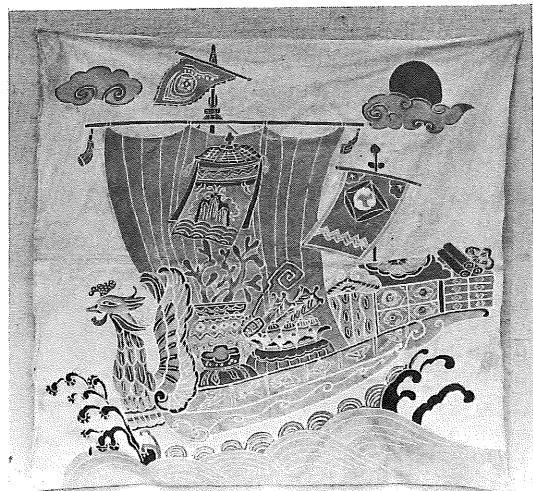
⑥夜光貝 ↑

殻の内側の薄片を砕いて
豆汁にまぜ、白色の顔料
をつくった。



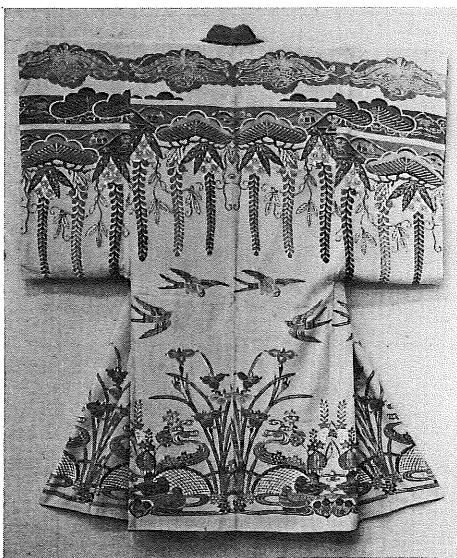
⑦型紙 ↑

米軍使用の厚手のハトロン
紙に彫った型紙。 1949年頃。



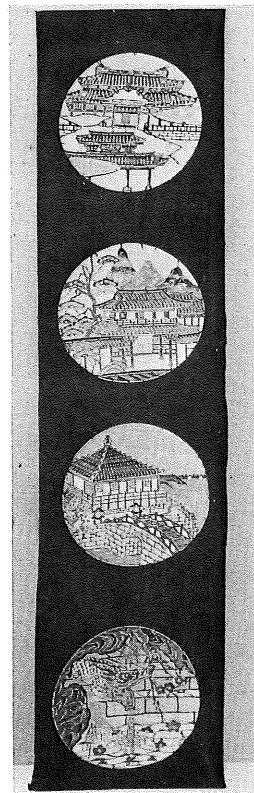
⑧筒描き宝船模様風呂敷 ↑

布地はメリケン袋、舷は瓦片を
つぶした粉、サンゴは口紅を使
って染めてある。 1948年頃。

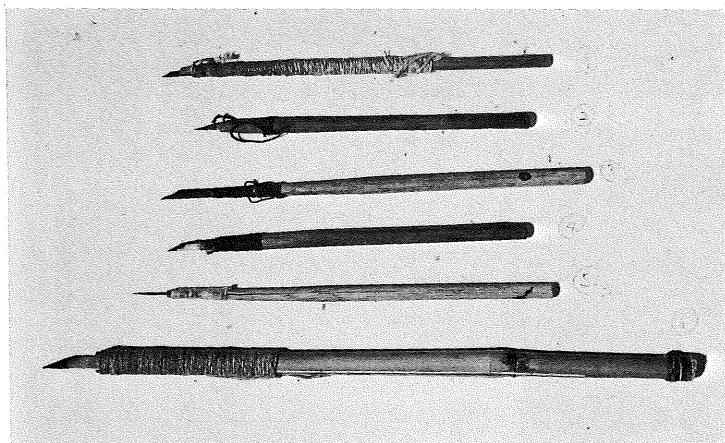


⑨黄色地鳳凰、燕に松竹梅、菖蒲模様縫衣裳
↑
田代孝子氏が1954年の沖縄タイ
ムス社主催新人芸能ベストテン
に賛助出演したとき着用したもの。
田代孝子氏所有。

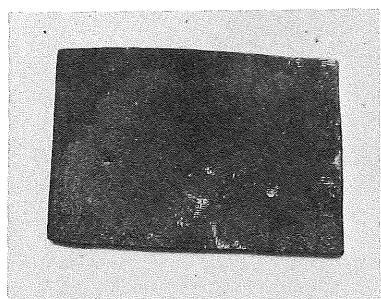
知念績弘氏



⑩首里風景模様額絵
↑
1949年頃。稻嶺一郎氏所有。



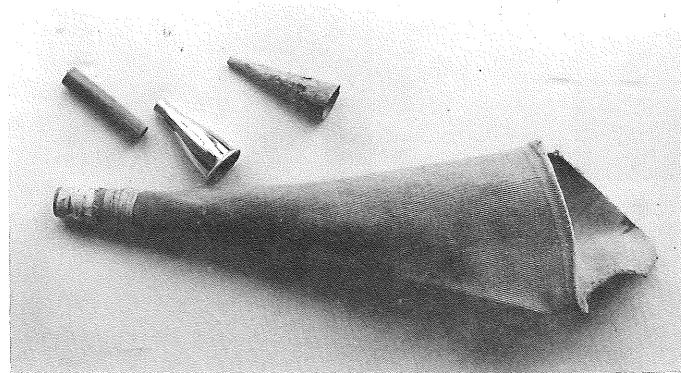
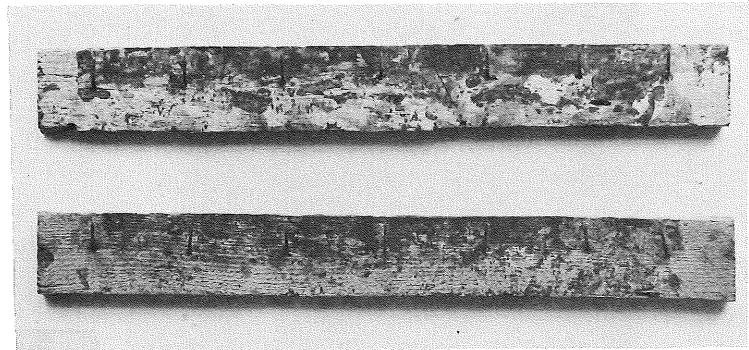
⑪型彫り用小刀(シーグ)
↑
時計のぜんまいで刃を、竹や竹箸
で柄をつくってある。1948年頃。



⑫型彫り用下敷
ゴム製。1948年頃。
↑

⑬張り木 →

杉板に釘を打ちつけて
つくってある。1955・6
年頃。

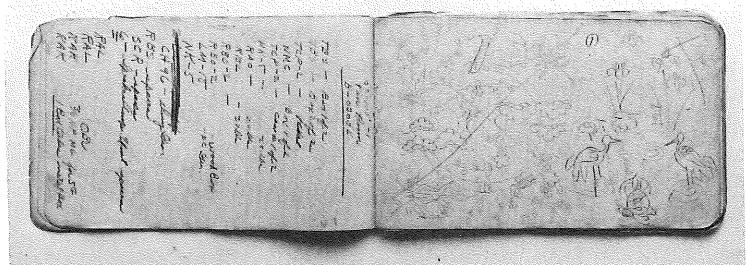


←⑭筒描用の筒と筒先

筒の布は米軍払い下げ。
筒先は竹製とブリキ製、
あとひとつは医療機器の
部品を利用したもの。
1948年頃。

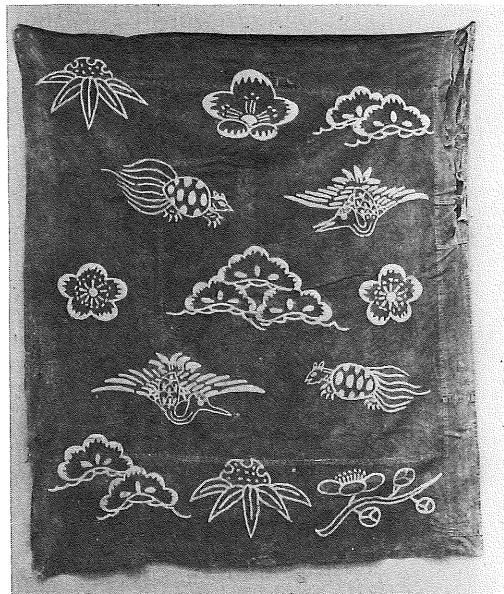
⑮図案覚書 →

米兵の落とした
ノートを利用し
ている。1950年頃。

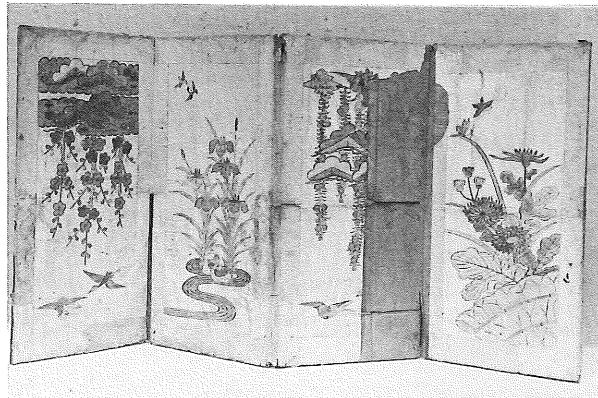


←⑯食 膳

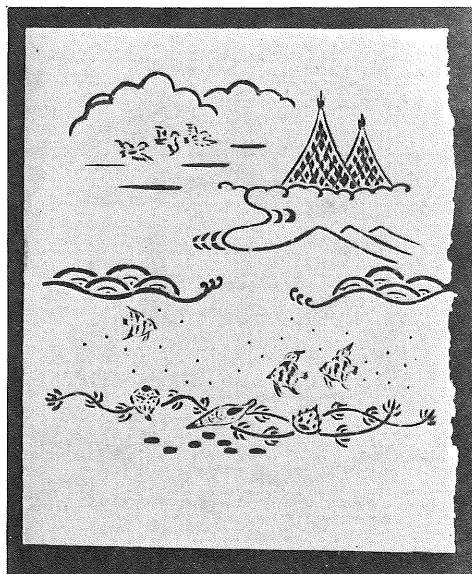
絵具でびんがたの図柄を
描き、その上にニスを塗
ってある。1957年頃。



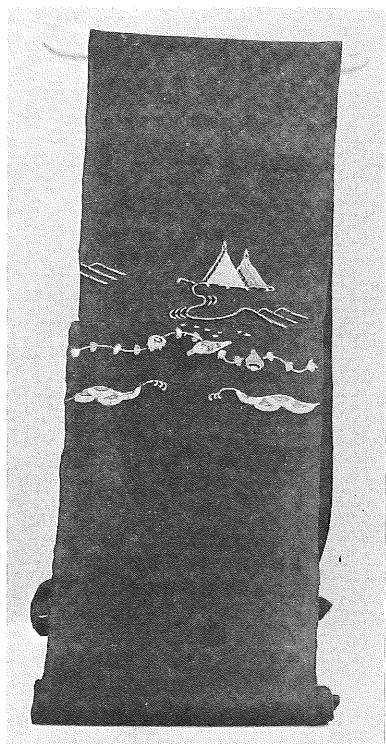
⑪筒描きふとんカバー ↑
米軍払い下げの厚手の木綿
布に藍で染めてある。1949年頃。



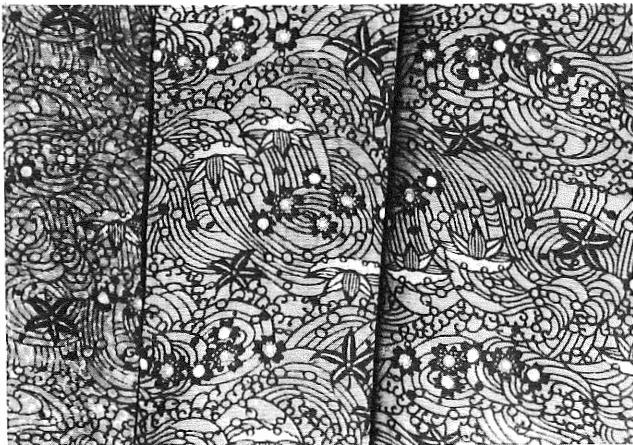
⑫段ボール製屏風 ↑
生まれたばかりの次女の風除けとしてつくったという。枠は木製、テント屋根の住居にいた1949年か1950年頃の作。



⑬型 紙 ↑
ハトロン紙にニスを塗って
つくった型紙。1950年頃。



⑭着 尺 ↑
左の型紙で染めたもの。
大宜味ツル氏所有。

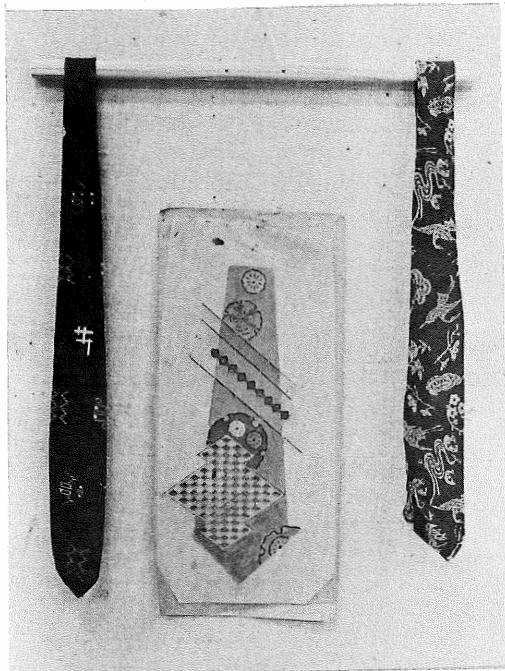


②藍ウブルー絹織着物(部分) ↑
京染めの着物をびんがたに染めなおしたものの、両面型つけ。1955年頃。
大宜味ツル氏所有。

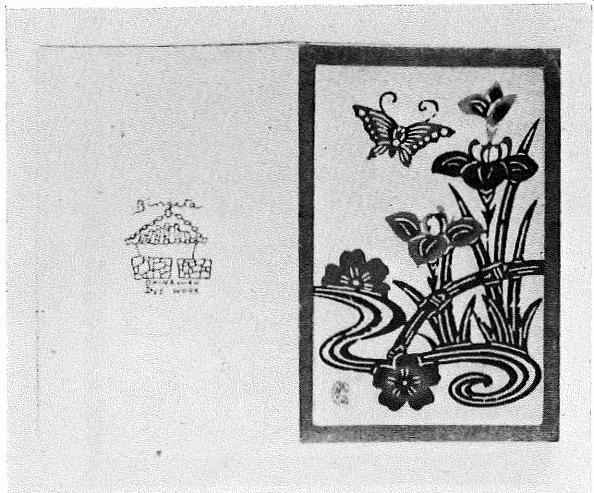


②訪問着 ↑
和服の訪問着に染めたびんがたとしては初期のものであろう。
知念悦子氏所有。

2. さまざまな試み



③びんがたのネクタイと型紙↑
1953年頃。(左・屋宜元六氏、中・城間栄喜氏、右・大城貞成氏)。



④クリスマスカード ↑
1953年から6・7年間さかんにつくられた。
1954年頃。城間栄喜氏。



㉕手さげ袋 ↑

1956年頃。玉那覇道子氏。



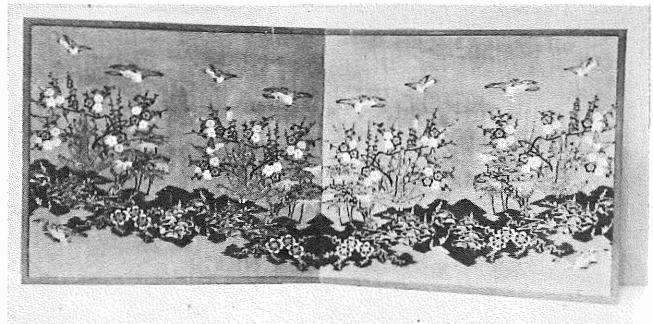
㉖スカート ↑

1953年の1955年協会第1回作品展に
出品したもの。藤村玲子氏。



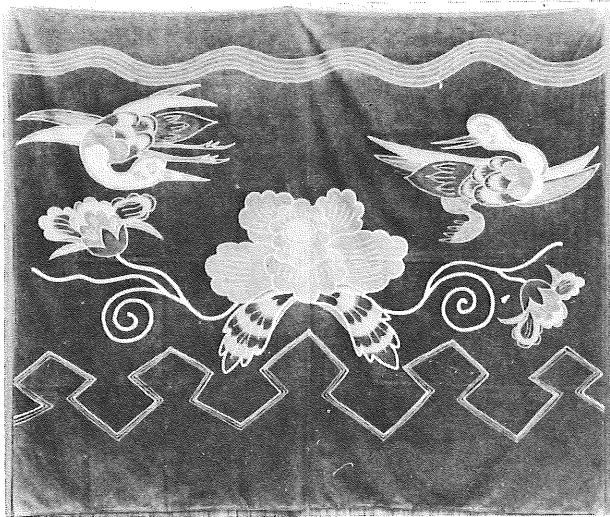
㉗鏡台掛 ↑

1953,4年頃。城間栄喜氏作。
田名克子氏所有



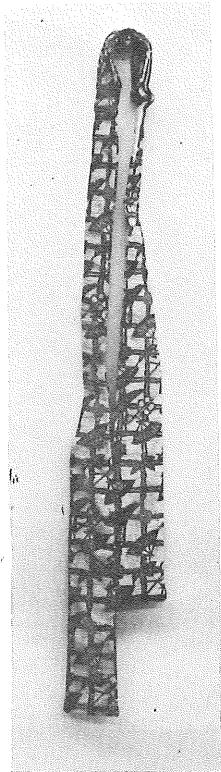
㉘風呂先屏風 ↑

第7回沖展出品。1955年。
大城貞成氏。



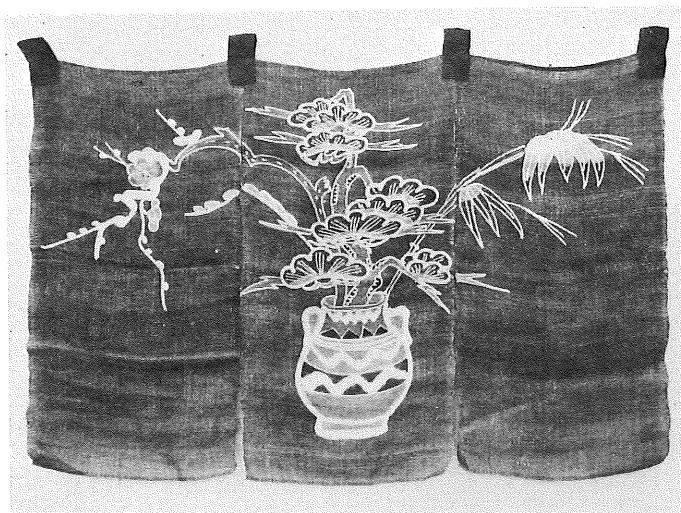
②筒描きピアノ掛け ↑

第8回沖展出品。1956年。
城間栄喜氏。



蝶ネクタイ ↑

1955年頃。徳村悦子氏。



③筒描きのれん ↑

第10回沖展出品。
1958年。城間栄喜氏作。
田名克子氏所有。

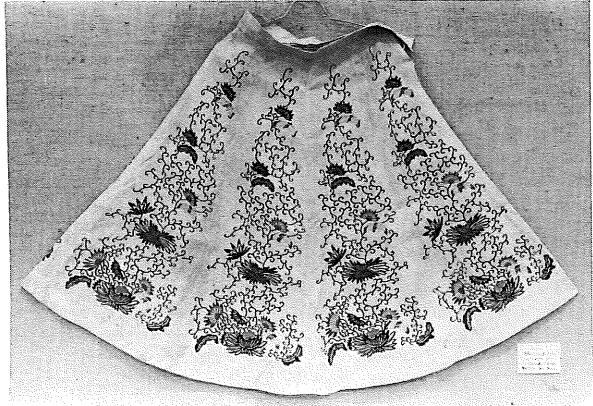
↓④ハンドバッグ

第8回沖展出品。
1956年。城間栄喜氏。

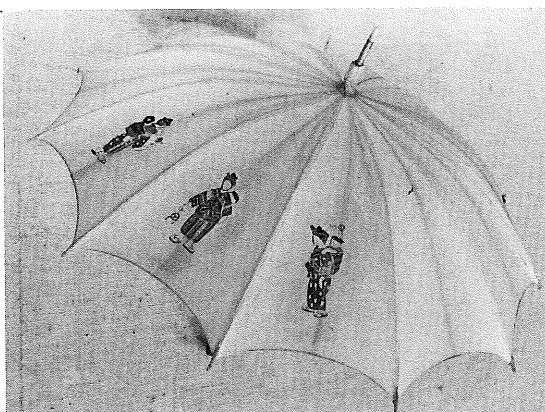




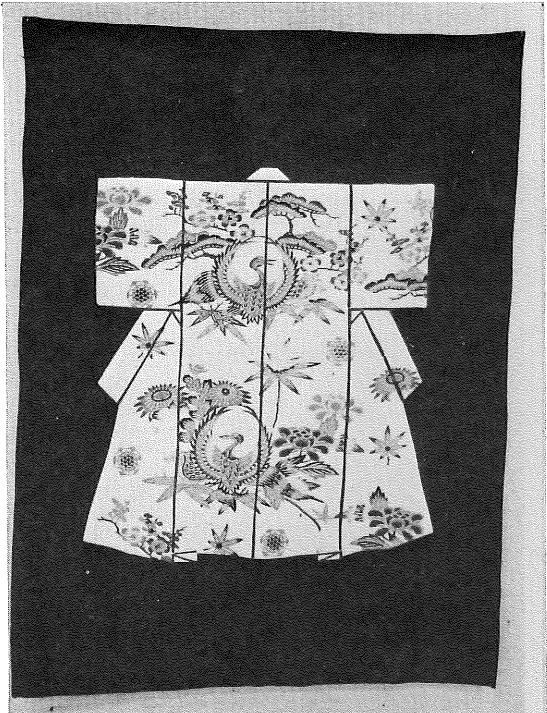
⑬テーブルクロスとテーブルマット ↑
1956年頃。徳村光子氏。



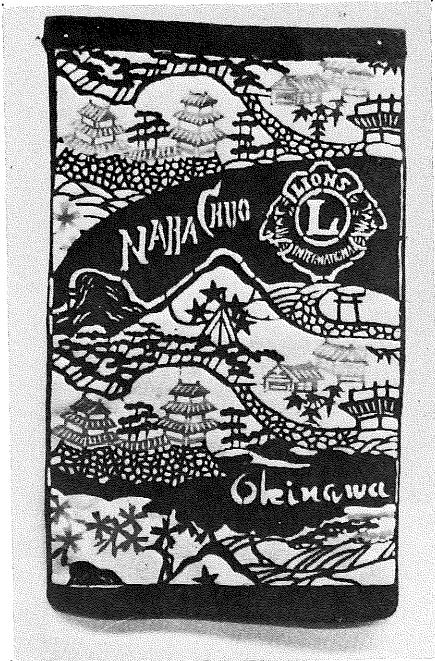
⑭スカート ↑
1956年頃。徳村光子氏。



⑮パラソル ↑
既成品の傘に染めたもの。
第8回沖展出品。1956年。
玉那覇道子氏。



⑯壁かけ ↑
1960年頃。城間栄喜氏。



③ライオンズクラブ小旗 ↑

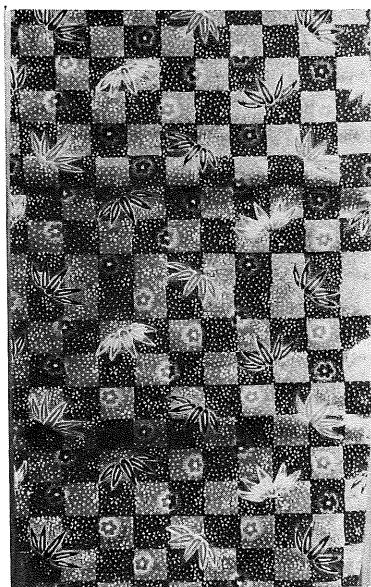
1962, 3年頃。屋宜元六氏。



④カトリック教会神父の祭服、ヴェール、ストラ ↑

1963年。城間栄喜氏作。大城清正氏所有。

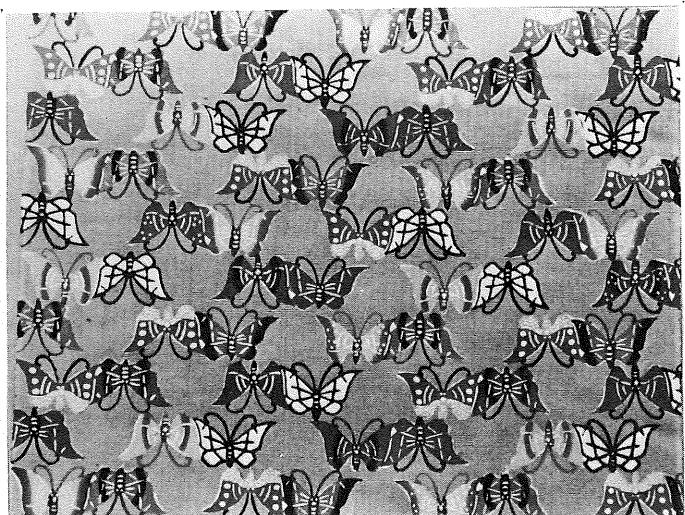
3. 美術家の参加



⑤段染め竹葉に梅模様帯 ↑

第3回沖縄展出品。1963年。

大城貞成氏。

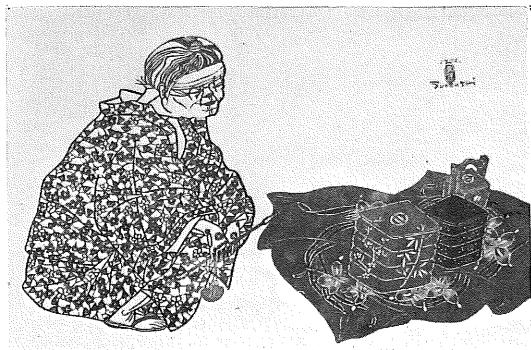
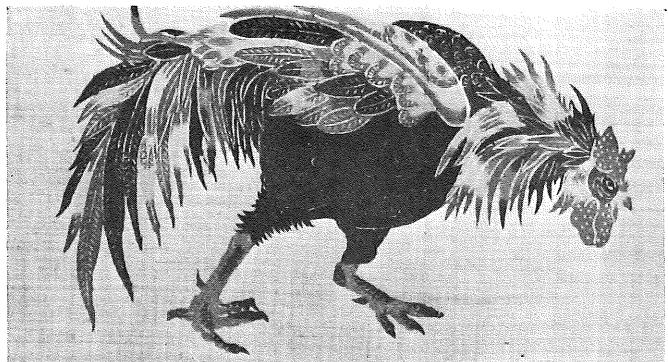


⑥浅葱地蝶模様帯 ↑

第40回国画会入選。1966年。

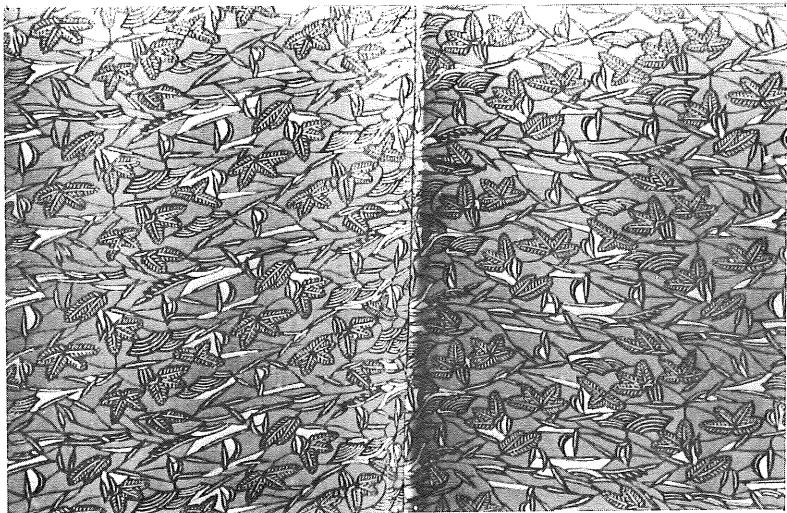
屋宜元六氏。

④ 鶴模様屏風(部分) →
1962・3年頃。森田永吉氏作。
森田文氏所有。



← ④ 型絵染め「清明祭の頃」
1972年。末吉安久氏。

④ 灰色地若松に
 笹舟模様着物
(部分)
 1963年頃。名渡山愛順氏作。
 名渡山千鶴子氏所有。

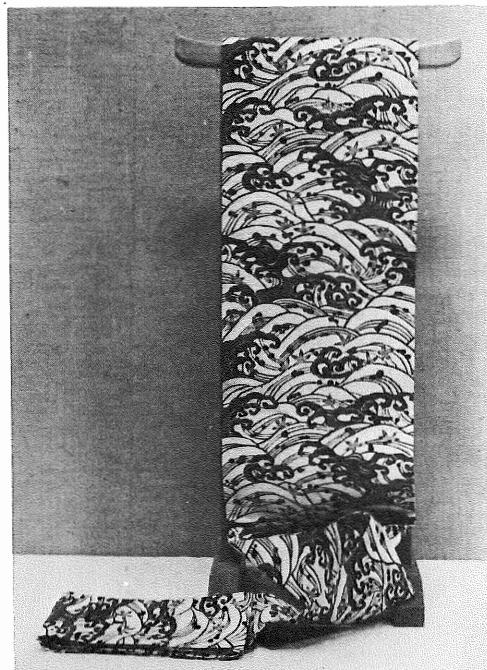


4. 女性の参加

④踊衣裳「梅」 →

第14回沖展出品。1962年渡嘉敷貞子氏作。

田名克子氏所有。



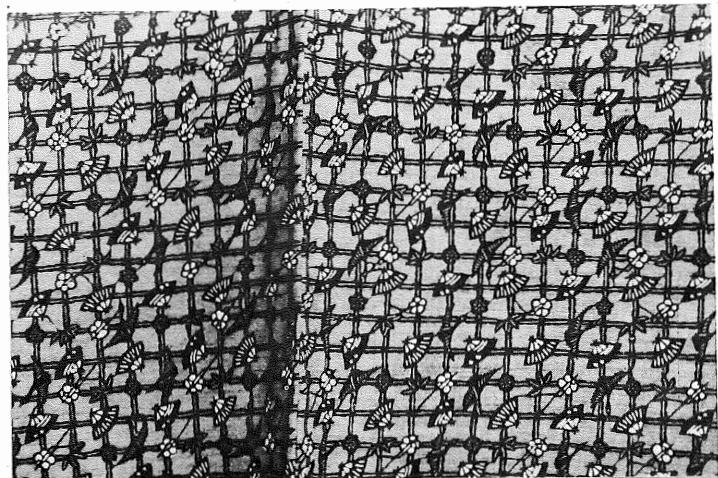
← ⑤波に楓模様帶

1963年頃。名渡山千鶴子氏。

⑥葡萄色地竹に蝶 →

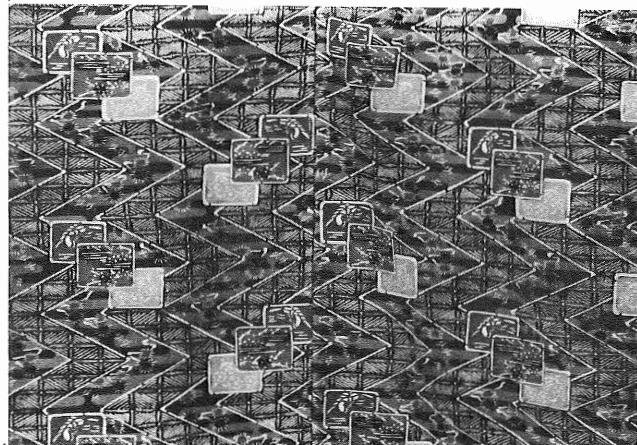
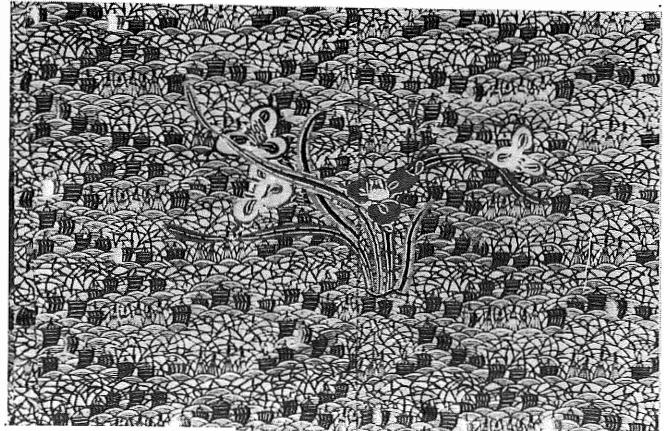
末広模様着物(部分)

1961年頃。城間鶴子氏。



④花色地重ね型帆掛船に菖蒲 →
模様茶羽織

第11回沖展出品。1959年。
玉那霸道子氏。

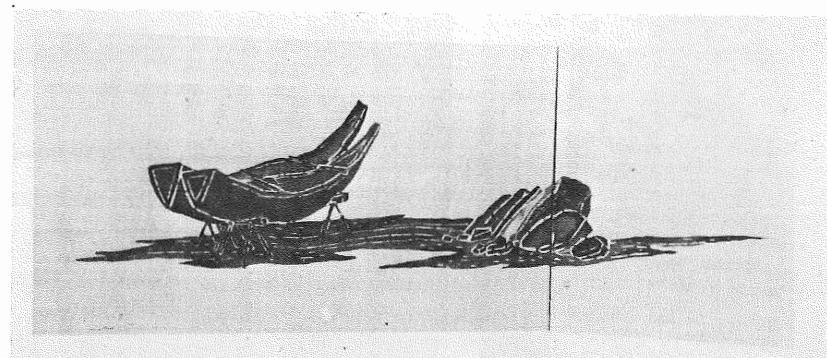


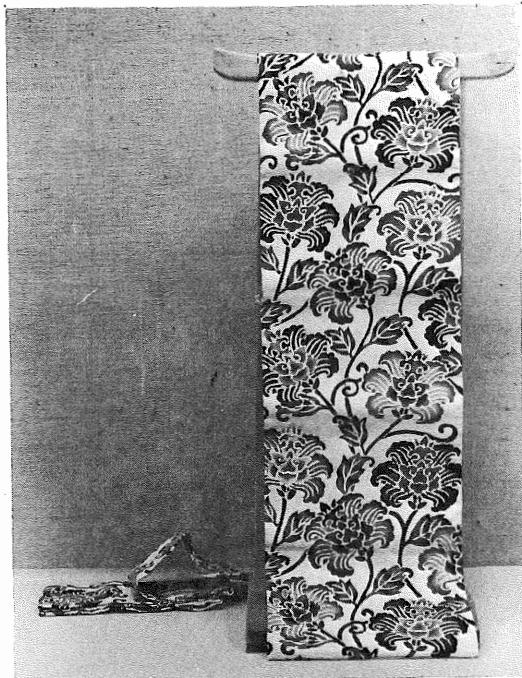
◀ ④⑧浅葱地重ね型鶴に松梅
幾何模様着物(部分)
1965年頃。藤村玲子氏。

5. 首里高校工芸課程の創設

⑨サバニ模様屏風(部分) →

1961年。第1期生作品。
デザインは森田永吉教諭。





⑤0帶 ↑

1961年。第1期生小渡光子作。



⑤1鏡台掛 ↑

1961年。第1期生作。

デザインは末吉安久教諭。

← ⑤2鏡台掛

1961年。第1期生作。

デザインは森田永吉教諭。



⑤3雀に稻穂模様屏風 ↑

1961年。第1期生作。デザインは末吉安久教諭。

